

# 教職大学院 News Letter 協創

## にいがた教育フォーラム 2019 in July

## 第9号

### 特集「授業」vol. 7

2019.10.1

Since2016

7月27日(土)、新潟の教育についてともに考える「にいがた教育フォーラム 2019 in July」を開催いたしました。前半は松木健一先生からご講演をいただき、後半はテーマ別に4、5人で語り合うラウンドテーブルを行いました。

## 講演「育つこと 育てること

### ～教員としての資質・力量の形成を図るために～

福井大学 理事副学長 松木 健一 氏



教師は教える専門家ではなく、学びの専門家です。これが今日の話の結論です。

知識基盤社会の中、学校は荒波や強風にさらされています。その原因は二つ、人口減少と社会構造、産業構造の変化です。

人口減少によって求められる資質・能力は変化してきています。生産年齢人口が減り、これまで通りでは豊かさを継続することが困難になってきたからです。

これまでの学校は子どもに勤勉性を求めてきました。しかし、子どもの発達がかつてよりゆっくりになったため、子どもがついてこられなくなってきています。それが反抗と挫折と引きこもりを生む要因になっているのです。乗り越えていけるコンピテンシーを育てていかなければなりません。

急激な高齢化社会を迎えているのはアジアとアフリカです。日本や韓国がこれからのモデルとなっていくはずですが、生産年齢人口を増やす方法は二つです。生産年齢の年齢上限を上げること、そして、移民受け入れを拡大することです。

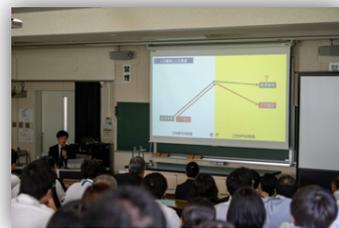
知識基盤社会は知識を消耗する社会です。学ぶべき知識はどんどん変わっていきます。学校の役割も変わらざるを得ません。これまでは教師は「教える人」でした。しかし、これからは「学ぶ人」にならなければなりません。探究の同伴者であること、これが教師に求められている資質・能力なのです。

「学校種を超えた学校の創造」「ネットを用いたバーチャルな学校の創造」「ソーシャルキャピタルを生かした複合型学校の創造」等、学校のかたちも変わっていきます(The form of school changes)。

このような学校のかたちの変化に伴い、新たな教師の資質・能力が問われるようになるのです。

社会構造の変化により、知識そのものではなく、状況に照らして知識を創り出す能力、その知識を状況に照らして運用する能力が問われています。そのような社会が Society5.0 なのです。

学習指導要領が、コンテンツベースからコンピテンシーベースとなりました。しかし、コンテンツのない教育はありません。しかも、コンピテンシーは直接的に教示できません。どうすればよいのでしょうか。そのヒントは幼児教育にあります。幼児教育には5領域はありますが、コンテンツは決められていません。幼児教育は遊びを通し、一貫して資質・能力、つまりコンピテンシーの育成を行ってきたのです。



現在の教育は、カリキュラムがオーバーロードしています。現状のディマンドに基づくカリキュラムを組んでいることに原因があります。

ですから、将来のディマンドに基づくカリキュラムにすればよいのです。しかし、コンテンツは予想不能です。だから、コンピテンシーなのです。

教師は学校で育ちます。教師は独りでは育ちません。学校に学び合う専門職のコミュニティをつくるのが求められているのです。

(文責 渋谷 徹)

## ラウンドテーブル *Round Table*

### 教科等の横断した学びについて考える

【教育課程編成】

教育実践コース 現職院生 2 年  
山本 啓介

私たちのテーブルでは、話題提供者の発表をもとに「①中学校美術科と各教科とのつながり」、「②国語科と総合的な学習の時間とのつながり」について考え、意見交換を行いました。その際、フォーラムの前半で講演していただいた福井大学の松木健一先生の講演内容に重ねながら話し合うことで、現在研究していることは、どのような意味や価値をもつのか、より具体的に捉えることができました。例えば、松木先生が「知識基盤社会」で資本を投入する上で重要視されていた発想段階において、アートや美術的な考え方の大切さという観点から意見が出され、話題提供者の美術科の実践が将来につながっていくことを価値づけていただきました。また、発意・構想・構築・遂行・省察の学習プロセスと、私が話題提供した総合的な学習の時間の取組の関連性に話し合いが及び、重点的に各学年がこれらの学習プロセスを経験できるように教育課程を編成していくことが重要であると改めて確認することができました。

ラウンドテーブルを通して、参会者の先生方と意見交換をすることで、教科横断することの価値や身に付いた学力が将来どのように役立っていくのか等、広い視野で実践について考えることができました。いただいた貴重な意見を研究に取り入れながら、後期も理論と実践の往還を図っていきます。

### 学習環境を拡張する ICT 機器の活用

【教育課程編成】

教育実践コース 現職院生 1 年  
菊地 清勝

私がこれまでの実践の中でどのように ICT 機器を活用してきたのかを振り返った時、距離が離れていてコミュニケーションを取ることが容易でない時に、そこをつなぐために ICT 機器を活用していることに気づいた。そこで、ICT 機器の活用により、今まで時間が掛かったり、困難だった活動がどのように変化するのか、それにより学習環境はどのように拡張されるのかを研究しようと思った。ラウンドテーブルの話の中で、私がやろうとしていることは、単に ICT を使える人になるレベルだということに気付かされた。教職大学院で学ぶということは、そこで止まるのではなく、一つ俯瞰した視点に立つことが大切であること、教育実践コースで研究しながら、現場に戻った時に、BIG データの活用、スタディログの活用、スマートスクールへの対応と、文科省より出た「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策」で現場が動き出す時に、そのエビデンスとなるように考えて実践、研究していくことが大切であると思った。ハードウェアやソフトウェアを整備していく際に人を説得できるように

準備していくこと、その視点をもつことで、教職大学院で学ぶ意義があると考えた。これはこのラウンドテーブルで議論をしなければ気付かなかった、得られなかった考えである。やはり、色々な視点で意見を交わすことは重要である。今後もこの姿勢は持ち続けたいものである。まさに私自身が主体的・対話的で深い学びを実現していくことが必要だと感じた。

### 協働学習による一人一人の子どもの学びの深まりを目指して

【授業づくり】

教育実践コース 現職院生 2 年  
番場 裕輔

「協働学習によってどの子どもも主体的に探究し、互いに学び合う授業を実現したい。」、そのような願いをもって授業づくりに取り組んでいます。

ラウンドテーブルのメンバーは、教職大学院を修了された先輩の現職教員 2 名と私を含めた院生 2 名でした。自身の研究について、協働学習を実現するために一人一人の子どもが「問い」をもつことと、教科における見方・考え方を働かせるための「教師の足場かけ」に着目していることを聞いていただきました。「子ども同士が学び合うことで相互に豊かな学びが起きる姿は興味深い。」と共感的に受け止めていただきました。同時に、多様な子どもたちが主体的に学ぶための足場かけの在り方とその難しさについて、授業の具体的な子どもの姿を想起して語り合い、共有することができました。先輩の現職教員からは、研究を自身の授業づくりに留めるだけでなく、校内の教員と連携し校内研究へと広げていくことでさらに研究が深まるという視点もいただきました。

校種や専門教科も多様な立場の方々、教職大学院を修了された先輩の方々と語り合う貴重な機会となりました。ラウンドテーブルで得られた多様な視点を今後の研究に生かしていきたいです。



### 自分の考えを言語化することの大切さ

【授業づくり】

教育実践コース 学部新卒院生 1 年  
松本 晴菜

私のグループでは、「対話」に焦点を当てて授業づくりについて話し合いました。これまでの実習で参観した授業や実践した授業をもとに、音楽科授業における「対話」の成立についての自身の考えをお話しました。音や音楽、体を動かす活動による「対話」が非常に有効的であり、「対話」というのは言葉のみに限らないことです。しかし、さまざまな種類の「対話」が拡散している

ことをご指摘いただき、根本的なところから整理して考える必要があると感じました。私は、音楽科における「対話」は他教科における「対話」とは異なるを意識していましたが、そもそもの「対話」って何かという、大切な部分に目を向けることができていなかったことに気付きました。今回は自分の考えを言語化して他者に伝えることで、自分自身の考えを整理することができたとともに、「対話」に関わる様々な実践について交流することができました。ラウンドテーブルを通して学んだことを今後の自身の授業づくりに生かしていきたいと思えます。

### 主体的に学びコミュニケーション能力を高める英語科の授業

【学年・学級経営】

教育実践コース 現職院生 1 年  
武石 裕子

「学級経営」のラウンドテーブルということで、「授業を通した学級づくり」について話し合った。同じ授業でも学級によって進めやすさの違いがある。それを学級や担任の個性によるものだから仕方がないと諦めずに、「多彩な活動ができる学級」を授業を通して作っていくことが大切だと感じた。そのためには生徒が「できる」と感じる授業づくりが大切である。生徒と教師が目標を共有し、何ができるようになったかを見取り、生徒の次は何ができるようになりたいのかの思いをつなげる授業の組み立てが必要だと感じた。「学級づくり」のポイントは「一人一人を大切にすること、学級が心の基地になれるかどうか、ヒドゥンカリキュラムに気を付けて許すところと許さないところをはっきりとさせる」の三つであるという話になった。生徒が一日の学校生活の中で最も多く時間を過ごす「授業」が「学級づくり」を意識したものに変わると、「学級」自体が変わり、「授業」も変わると思う。一日の中で、一人でも多くの生徒の笑顔が見られるような学級にしていきたい。様々な立場の方々と思いを伝え合い、実践に生かすたくさんの学びをもらえた充実した時間になった。



### 「問い」が生まれる授業を考える

【学年・学級経営】

教育実践コースコース 現職院生 1 年  
高野 有弘

ラウンドテーブルでは、採用 2 年目の先生、ベテランの先生、現役の大学生と年齢も立場も違う方々が集まり、「リーダーシップの育成」と「数学の授業づくり」について話し合いました。

私は、生徒が「問い」をもって学ぶための数学の授業づくりについて話をしました。教師の問題提示 (What) から始まり、生徒の「問い」を基にして学習課題 (How to, Why) をを設定し解決していく流れ (「問題解決の授業」) については、今求められている授業スタイルであるという話になりました。しかし、全ての教科、場面で行うことの難しさや学習課題の質について話題になりました。また、「メタ知識とその限界」の視点についての話では、「英語でも、新しい知識を学ぶときに、既習の知識の限界に気づかせ、新しい知識を学ぶ必要性をもたせていた。」というお話でした。これは、数学の授業に限らず他教科や様々な場面で活用できることだと思いました。

この「問題解決の授業」スタイルに「メタ知識」の視点をどう組み込んでいくかで、新しい授業スタイルが確立されていくのではないかとご指摘いただきました。先行研究から学んだことを踏まえ自分らしさが出せる研究を行っていきたくと思いました。

### 校種・立場を超えた対話から生まれる学び

【学校経営】

学校経営コース 現職院生 1 年  
大竹 直志

私たちのテーブルでは、保幼小の円滑な接続を図るスタートカリキュラム、同僚性を高めるための小学校におけるローテーション道徳について話題を提供した。参加者は、中学校の教諭、小学校の教頭、校長、行政の方等様々な校種・立場の方や、講師の松木先生も私たちのテーブルに付き、参加して下さいました。保幼小の接続については、改めて幼児教育の重要性を感じる事ができました。私たちのテーブルは、「学校教育と教員の在り方に関する領域」であったが、共通していたのは、「人を動かす」ことの難しさと大切さであったと思う。カリキュラムやシステムを管理職や一部の教職員ではなく、関係する教職員全員が協働しながら作成・運用していく必要がある。それができて初めて「生きたカリキュラムやシステム」になるのではないかと感じた。

このラウンドテーブルでは、様々な校種や立場の方と直接対話することができ、情報交換にとどまらず、難しさや悩み等本音の部分も語り合えるとても有意義な場であった。その中で、自身の課題研究が本当に現場のニーズに対応できているかを見直す機会になった。



**校内研修の問題点と改善策【学校経営】**

学校経営コース 現職院生 2年

小森 康貴

最初に私の実践を紹介しました。テーマは「同僚性・協働性を活用した参画型校内研修による授業力の向上」です。授業者が一人で苦しむ授業研究ではなく、同じ学年のメンバーがお互いに同僚性・協働性を発揮しながら授業力を高めることができる研修体制の確立を目指した実践です。いかに授業者以外のメンバーに当事者意識をもたせることができるかがポイントです。そのために、学年全員で授業を構想し、全員が同じ指導案で授業をし、全員で授業を振り返るシステムを導入しました。参会者からは、「職員全員が当事者意識をもつことは大切」「研修を支えるために職員の支持的風土の醸成が不可欠」といった、とても勉強になる意見が出されました。

後半は、中学校の「教科の壁」の問題が話題となりました。中学校は教科担任制のため他教科の教員が意見を言いにくいので、効果的な校内研修の推進が難しいようです。その解決策について参会者で話し合いました。

「研究テーマをどの教科にも関係することにする」「教科を解体したグループ編成にする」など、有意義な意見が出されました。

様々な立場の人が集まって校内研修について語ることで、新たな視点をたくさん得ることができ、とても充実した話し合いになりました。

**中学校社会科における「誰にでも分かる授業づくり」～学びのユニバーサルデザインの視点から～**
**【特別支援教育】**

教育実践コース 学部新卒院生 1年

高橋 拓巳

私は2名の特別支援学校の先生とグループになりました。幸運にも、お二方とも社会科の先生でしたので、恵まれた環境のラウンドテーブルとなりました。

私はどの生徒も授業に参加できるような授業づくりはどのようにしていけばよいのかを、前期に行った中学校社会科の歴史的分野の授業実践から振り返ることにしました。そして主に、「提示資料」と「発問・学習活動」についてご意見をいただきました。

まずは、提示資料です。授業の工夫として、視覚的に認知できる資料(絵)の方が、文字資料よりも理解が促進されると考えました。しかし、実際に使った資料を先生方に見せたところ、「まだ、文字資料が多い。もっと減らした方が良い。」というご意見を頂きました。

一方で、授業で行った「自分がもし歴史上の人物ならどうするか?」という発問は、とてもよい評価を頂きました。「子どもの学習意欲を掻き立て、子ども全員が取り組めるワクワクするような活動」だと言っていました。

今回のラウンドテーブルは、日ごろの授業では聞くことができない、現場からの意見を聞くことができるよい機会となりました。また、自分の授業実践を振り返ることができただけでなく、後期の授業実践へ向けてのヒントにもなりました。

**新たな気づきを得たラウンドテーブル**
**【特別支援教育】**

教育実践コース 現職院生 1年

渡部 久美子

特別支援教育グループは、「UDLの視点を用いた授業づくり」「発達障害の理解と支援」「応用行動分析を用いた校内研修」「特別支援学校の図書の利用」などを話題として話し合いが行われました。現職の先生方、大学生、学部卒院生、現職院生、大学教員といった年齢も立場も様々なメンバーが、それぞれの異なる立場で意見を交流しました。

参加したグループでは、「UDLの視点を用いた授業づくり」について話し合いが行われました。「子どもが追求したくなる問い」「吟味された資料の活用」「話し合いや発表などが活発に行われる授業」が話題となりました。印象に残っているのは、「資料の活用」についてです。みんなが分かる資料にするために、文章で書かれた資料の代わりに漫画を用い、その際分かりやすい言葉に言い換える、見やすい文字の大きさにするなど具体的なアイデアが出され、自分の授業にも取り入れてみたいと感じました。

ラウンドテーブルに参加し、様々な立場の方と意見交換することは、新たな視点を得るきっかけとなり、自分自身の学びを深めることにつながると実感しました。


**参加者の声 ～アンケートより～**

- ・ 前回のフォーラムで一緒した先生とまた同じグループでお話することができました。提供された話題をもとに、その後、どのような実践をしてきたか、どんなことに困っているかなどをお話することができて有意義でした。
- ・ 大学院生の方から研究実践を紹介していただき、実践ベースで情報交換ができた。また、中学校、小学校所属の方がいらっしやっただので、様々な視点で語る事ができた。
- ・ 今、自分が悩んでいることについての旬の話題で、自分がどうすべきかが少し見えてきました。何を狙っているのか、そこをもう一度しっかり考えてやっていきたいです。

## 特集「授業」～選択科目～

本学教職大学院の授業について紹介します。

### 教科教育実践「授業改善と学習評価 B」

(場所 大学)

担当：阿部好貴、垣水修、土佐幸子、  
附属学校教員

この授業は、数学教育、理科教育をそれぞれ専門とする教員が協同して担当し、数学および理科の授業のあり方を批判的・建設的に検討するとともに、数理系の教科横断的・教科融合型の授業の可能性と、今後ますます高まるであろうその役割について検討していくことを目標としています。附属長岡中学校からも、理科と数学がそれぞれ専門の先生2名に参加していただき、院生も数学教育と理科教育、現職教員の人とストレート・マスターの人というように、参加メンバーは多様性に富んでいます。いつも具体的な題材をもとに、各自の科学観と数学観、教育観と授業観、それぞれが取り組んでいる研究課題との関わり方等をぶつけ合いながら、活気に満ちた有意義な議論が展開していきます。

この授業はまた、受講者一人ひとりの授業力の高まりと広がり役立つように、受講者それぞれに授業案を作成してもらい、それらを検討していくことも重視して行っています。

(垣水 修)

・・・院生の声・・・

数学と理科の融合について、具体的な問題を通して学んだり、それぞれの立場で議論したりしました。違う立場の方々と話すことで、たくさん刺激を受け、数学と理科の捉え方について深く考えることができました。指導案検討では、生徒の思考を重視した視点で議論が行われました。学習課題の構成場面や練り上げの場面等について考えることを通して数学的または理科的に思考させるにはどうすればいいのか、ということについて考えることができました。

(教育実践コース 現職院生  
高野 有弘)



### 教科教育実践「授業改善と学習評価 C」

(場所 大学)

担当：伊野義博、大庭昌昭、永吉秀司、  
附属学校教員

今年度より新設された本授業は、芸術・体育系の教科教育の意義・目的に照らした教科内容について体系的に理解し、幅広い視点から教材開発・教材研究を行うことを通して自身の課題を明確にすることを目指して進められています。各教科の目標に掲げる資質能力を育成できる授業をデザインし、芸術・体育系における学習評価方法も含めて綿密な授業計画を作成しました。

作成した計画をもとに4名(音楽1名、美術1名、体育2名)の受講者は、実際に協力校で授業実践を行ったり、協力校における実際の授業を参考に授業計画の改善を図ったりし、自らの課題発見に向けた検討を行ってきました。

(大庭 昌昭)

・・・院生の声・・・

「授業改善と学習評価 C」では、音楽科、美術科、体育科の院生で構成され、学習評価を含めた授業計画の作成を通して、授業の導入における課題意識の醸成や課題解決における教師の支援の適切性について、教科の枠を越え、互いの考えを交流させながら理解を深めてきました。その中で、目指す授業像を明らかにするとともに、授業実践を通して、自身の授業における課題を発見することもできました。そして、日々の授業の中で授業改善と学習評価を行っていく重要性を強く感じました。

(教育実践コース 現職院生  
大関 一教)



## 学校経営「学校安全計画と地域防災」

(場所 新潟市立柳都中学校)

担当：雲尾周、川端弘実

21世紀になってから大きな地震を2度経験した新潟県は、風水害、雪害も多い土地であり、地域防災と連携協力した学校安全計画の必要性がとくに高いところです。そこで本授業は、学校の危機管理を現場に即して実用的に学びます。平成28・29年は新潟市立小針小学校、次の2年は同市新潟柳都中学校にご協力いただき、当該校の安全計画や安全マップについてご教示いただいたり、コミュニティ協議会の防災担当者に地域の実情をうかがったりしました。



学校屋上への避難訓練の参観



非常トイレの組立



モニターを見ながら心臓マッサージ

また、総合大学における教職大学院の利点を生かし、日本の災害食（非常食の発展形）をリードする新潟大学フードサイエンスセンター教員から実地にご指導いただき、救急法にしても、新潟大学医学部教員より実務に基づく実践的指導を受けています。

当該校で実施される避難訓練の参観も行いますので受講者はどこの学校に赴任しても防災担当になれることでしょう。(雲尾 周)

### 【編集後記】

にいがた教育フォーラム2019 in July 特集をお届けします。今回は、「教職員の資質・力量形成をどのような図っていくか」をテーマとし、講演やラウンドテーブルを実施しました。「教師はローソクのようなもので、みずから燃やしつつして生徒を啓発する」の格言の如く、子どもとともに教師自身も学び続けることの重要性和喜びを感じることがフォーラムでした。多くの方からご参会いただきありがとうございます。

(尾身浩光)

## 特別支援教育「特別支援教育における教科指導の理論と実践」

(場所 大学と県内特別支援学校)

担当：入山満恵子、横掘壮昭

本授業は、特別支援教育における教科指導について、理論を学びながら、具体的な実践力を身に付けることをねらいとした講座です。

令和元年度前期の授業では、教科指導に関わる「言葉の発達」について、具体的な事例をもとにしながらい理論を理解していきました。また、WISCやK-ABCなどのアセスメントについて実際に検査器具を操作しながら体験的に学びました。

さらに、通常学級で特別な支援が必要な児童に対する支援について、特定の学校の校内研修と連携し、継続的に取り組んできました。

最終的には、県立の特別支援学校の公開講座の場を借り、特別支援教育に関する公開講座を実施しました。その中で、受講の院生が部分的に講師を担当しました。

毎時、受講生も授業者も一緒に考え、意見を交換させながら進めていきました。本授業を通して、受講生が教科指導に関する理論と実践力を身に付け、特別な支援が必要な子どもたちの力を高めてくれることを願っています。(横掘 壮昭)



お知らせ

「にいがた教育フォーラム2020 in March」

開催日時：令和2年3月7日(土)

お待ちしています！

 新潟大学教職大学院 News Letter 「協創」 第9号 2019.10.1 発行  
 編集・発行・印刷

 新潟大学大学院教育実践学研究所(教職大学院) 広報委員会  
 〒950-2181 新潟市西区五十嵐二の町 8050

問い合わせ先: kyousyokudaigakuin@ed.niigata-u.ac.jp

 ホームページ URL: <http://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/>

ニュースレター、各種案内等はHPに随時掲載しています。